Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2026-11-29

高等学校「地理歴史科」教員養成プロジェクト : 概要・現状・課題（活動報告）

河島, 真

(Citation)
Link : 地域・大学・文化 : 神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター年報,11:227-230

(Issue Date)
2019-12

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/81011943

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81011943

KOBE UNIVERSITY

合併問題に加え、アジア・太平洋戦争期の住吉村の動向や空襲被害について記されている。戦後に開発のすすむ渦森山からの銅鐸出土や荒神山の遺跡に関する記述も豊富であり、古代から住吉の地が栄えてきた歴史がうかがえる。

第三章「宿命の災害」では、数々の災害を経験し復興を果たしてきた住吉村の災害史が語られる。住吉歴史資料館が行なってきた聞き取り調査をもとに構成される阪神・淡路大震災の記述も豊富である。

近年、住民たち自らが地域史をつくりあげる活動が各地で行なわれており、本書もこのような各地での取り組みの中に位置づけることができるだろう。地元密着の本書は、住民たちが地域の歴史に親しむために格好であるといえる。できるだけ多くの方の一読を期待するものである。

高等学校「地理歴史科」教員養成プロジェクト
――概要・現状・課題――

河島　真

プロジェクトの概要

神戸大学文学部では、二〇〇六年度から二年間、文部科学省「資質の高い教員養成推進プログラム」（教員養成ＧＰ）に採択された「地域文化を担う地歴科高校教員の養成」プロジェクト（事業推進責任者＝藤田裕嗣教授）を実施した。兵庫県立御影高等学校と連携し、地理歴史科（地歴科）の教員をめざす学生が、地域の地理、歴史、文化を取り入れた地歴科の授業を実践することを通じて、地域の文化を担う力をみずから鍛えるとともに、次世代の担い手を育成するという教育プログラムの開発をめざしたものである。[1] また、教員をめざす学生を現職の高校教員が指導し、高校生の課題研究を大学の教員が支援するという、それまでにはない国立大学と公立大学との新たな連携モデルとしても位置づけられた。[2]

教員養成ＧＰを立ち上げた文部科学省の意図は、教職大学院の設置を見据えて、主に教員養成系の大学・学部に対し、時代の要請に即しかつそれぞれの大学・学部の個性を活かした新しい教育プログラムの開発を促すことにあったようである。そうした中で神戸大学文学部の取り組みは異色のものであったが、応募した背景には、地域の歴史や文化を活かして、変容＝崩壊しつつある地域社会の再生のきっかけを得たいとする地域連携センターのそれまでの活動と問題意識とがあった。この時の取り組みの詳細は、すでに二冊の報告書に詳細にまとめているのでここでは省略する。[3]

教員養成ＧＰの終了以後は、教員免許取得に必要な科目「地歴科教育論」を毎年前期（四～九月）に開講してきた。授業担当者は、教員養成ＧＰの事業推進責任者でもあった地理学の藤田裕嗣教授と日本史学の私が長く務めた。[4] 履修は原則として地歴科の教員をめざす文学部生に限り、毎年一〇人前後、多い年度には二〇人ほどの受講生を得て、後述する御影高校における高校生の課題研究の支援と、現職の中学・高校教員を招いての講義とを組み合わせて行ってき

たが、これ以外に御影高校からは実際に地理・歴史の授業を行う機会の提供を受け、履修者の中から毎年数名が授業を行ってきている。[5]

連携先の御影高校は、神戸大学文学部（人文学研究科）から路線バスで二〇分程度のところにある普通科のみ（入覚定員総数は現在三二〇人）の県立高校である。これには、二〇〇五年に設置された総合人文類型（定員四〇人）、さらにこれをもとに二〇〇七年に設置された総合人文コース（定員四〇人）も含まれている。高校側では、神戸大学文学部との連携はおおむねこの総合人文類型↓総合人文コースの特色ある教育の一環とし位置づけられてきたが、高校のカリキュラムとの関係で、指導する学年やクラス（類型・コース）が変更となる年度もあった。二〇一九年度時点では、総合人文コース二年生のGS（グローバルスタディ）課題研究の一環である「GS人文地理」として開講されている。

「GS人文地理」の授業スタイルは、「地域」をテーマとする高校生の班別の課題研究を、大学生が分担して指導するというものである。大学の授業科目の趣旨からすれば、地歴科の科目の中で学生の指導が行われることが望ましいが、より自由な実践が可能な形を模索した結果、現状のようなスタイルとなった。一班の人数は高校生が二〜六人程度で、これに大学生が一〜二人ずつ加わって課題研究の指導を行う。大学教員と高校教員（現在はそれぞれ複数）も参加し、教員養成の観点から学生の、また課題研究支援の観点から高校生の指導に当たっている。研究期間は九月までで、最後に研究成果をパワーポイントにまとめて発表し、全員で相互評価を行ってきた。高い評価を得た班の研究は、兵庫県小・中・高校地域研究コンクール（同実行委員会主催）や、関西学院大学総合政策学部主催のリサーチフェアに参加し、別表のような成績をおさめている。

現在、御影高校と神戸大学の双方のウェブサイトで、プロジェクトの様子が発信されているので、そちらもあわせてご覧いただきたい。[6]

現状と課題

プロジェクトの開始以降、この授業を履修した学生の中から少なくない教員を全国に送り出してきた。[7]実際に現場での経験＝実践を重視するこの授業を履修したことを通して、改めて教職への適性を見出したり、教職への熱意を新たにしてくれた学生は、まちがいなくいたことであろう。また、御影高校で代々このプロジェクトを担当し、学生の指導に当たってくださった先生方のご尽力に対しては、どれほど感謝して

表　課題研究の主な受賞歴

年度	研究テーマ	コンクール名	主催	受賞
2010年度	神戸と外国人―落地生根―	兵庫県小・中・高校地域研究コンクール	兵庫県小・中・高校地域研究コンクール実行委員会	高校生レポート部門奨励賞 兵庫地理学協会長賞
2011年度	震災と震災におけるボランティア活動 ―自分は今、どうしたいのか―	兵庫県小・中・高校地域研究コンクール	兵庫県小・中・高校地域研究コンクール実行委員会	高校生論文部門最優秀賞 播磨町立図書館長賞
2012年度	ルミナリエ ―ルミナリエの意味とこれから―	兵庫県小・中・高校地域研究コンクール	兵庫県小・中・高校地域研究コンクール実行委員会	高校生論文部門優秀賞
2014年度	コミュニティバス成功の鍵	リサーチフェア	関西学院大学総合政策学部	審査員特別奨励賞
2015年度	言葉の壁　生存の壁	リサーチフェア	関西学院大学総合政策学部	奨励賞
2016年度	みんなが集う商店街 ―御影旨水館の生き残り策―	リサーチフェア	関西学院大学総合政策学部	奨励賞
2017年度	集まれ！地域の居場所へ ―こども食堂から広げる輪―	リサーチフェア	関西学院大学総合政策学部	実行委員会賞
2018年度	見えないごみをなくそう！ ―日本一美しい街神戸を目指して―	リサーチフェア	関西学院大学総合政策学部	審査委員会特別奨励賞

もしすぎることはない。そのことを踏まえた上で、この間の取り組みを通じて見えてきたいくつかの課題を率直に述べておきたい。

第一に、もともと地域の地理、歴史、文化を取り入れて地歴科の授業を行うことができる教員の養成を目的としていたが、別表からもわかるように、近年では地域社会の現状に見られる課題に対して解決策を提案するという政策提言型の研究が増えてきている。研究期間中に必ずフィールドワークを実施することにしているものの、これも地図を片手に現地を「調査」するというより、自治体職員や地元関係者への「聞き取り」が大半を占める。高校側も、近年では地歴科あるいは公民科を含めた「社会科」だけでなく、国語科や英語科など人文系の教員が参加する集団指導の体制を取ってくれている。それだけ、高校生への指導も大学生への指導も丁寧で行き届いたものになっている反面、地歴科という科目の専門性がやや薄れてきているのも事実である。

第二に、この授業科目の履修者は大半が大学の二年生、三年生であるが、まだ卒業論文のテーマさえ定まっていないこの段階の学生たちに、高校生を指導するに充分な専門性（必要な知識だけでなく、対象にアプローチする方法、研究成果をまとめる能力などを含む）を期待することは正直なところ難しい。高校側からは、大学生は指導者としてではなく、むしろ高校生たちの身近な相談相手になったつもりで高校生に接してくれればよいと言われているものの、大学生が高校生たちと同じレベルで悩んでいる様子を見かけることも多く、高校生を指導する前に身につけておくべきことの多さを実感させられている。課題研究も、九月の最終発表と外部のコンクール等に応募するためにその後仕上げられたものとを比べると、後者の方が圧倒的に出来がよい。時間をかけているからだとも言えるが、やはり高校の先生方の指導の成果であろう。大学生として高校生を指導するのに恥ずかしくない程度の基礎的な研究能力をどのようにして身につけさせるかが、目下大きな課題となっている。[8]

第三に、地域の地理、歴史、文化を教科教育に取り入れる、そして教員自身が地域文化の担い手になる、という理想を掲げて立ち上げられたプロジェクトであるが、実際にはそんな余裕は現場の教員にはないことを身につまされた。高校の教員は、担任、授業、生活指導、課外活動指導等に日々追われ、夏休みと言っても時間を自由に使えるわけでもなく、また教科指導は学習指導要領にがんじがらめにされている。加えて最近では保護者の目もある。教科の専門性を活かして地域の古文書を読んだり、自治体の発掘に協力したりする教員に対しては、「本来の仕事をしていない」というレッテルを貼られることもあろう。教員が地域文化の担い手にならなくなったのではなく（そういう面があることも否定できないが）、なれなくなっている現状を私たちはきちんと認識しておくべきである。そういう現状であることを理解せず（理解していたとしても考慮せず）、高校の教員に地域文化の担い手になってほしいなどと言うのは、現場を知らない大学教員の絵空事だと言われても仕方がない。[9]

もっとも、無理だと言って手をこまねいていては何も変わらない。無理とはわかっていても高い理想を掲げることが社会を変える原動力になるのであるし、そうすることが大学の教育研究に許された特権であり、また求められる役割でもある。問題は、理想を現実に転化するその「方法」である。鍵になるのは、教員の研修や校外での社会貢献を積極的に認め、さらに認めるだけでなく評価するシステム作りだ。教育行政主導でそうしたシステム作りを進めてゆくことが、こうした理想の実現には不可欠である。

最後に、それでもこれまでも課題研究の中からは、地域社会にひそむ問題、そこで生きている人々の思い（喜び、悲しみ、怒り、嘆きなど）

に寄り添う研究がいくつか生まれてきた。また、大学生が、立場を忘れて対象に没頭してゆくことで、高校生たちの心を動かし、思いがけない発見や成果を生み出す場面にもたびたび遭遇した。大学で机を前に講義を聴いているだけでは決して得られない、また教育実習で学習指導案に基づいた授業をつつがなく終えるだけは決して得られない、貴重な体験である。直接高校生と向かい合い、現場の高校の先生方の指導があってこそ可能なことであり、そこにこうした実践型の教員養成科目の意義を改めて実感しているところでもある。

註

（1）拙稿「地域歴史遺産の保全・活用における中学・高校教員の役割」（神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター編『「地域歴史遺産」の可能性』岩田書院、二〇一三年）の付図（四一三頁）参照。

（2）神戸大学大学院人文学研究科・文学部では、現在このプロジェクトを「高大連携プログラム」の一環として位置づけている。

（3）『地域文化を担う地歴科高校教員の養成　平成十八年度の取り組み』（神戸大学文学部教員養成GPプロジェクトチーム、二〇〇七年）、『地域文化を担う地歴科高校教員の養成　平成十九年度事業報告書』（神戸大学文学部・大学院人文学研究科教員養成GPプロジェクトチーム、二〇〇八年）。

（4）藤田教授が神戸大学附属中等教育学校の校長に就任したのにともない、二〇一七年度から小山啓子准教授（西洋史学）が加わり、ほかに伊藤隆郎准教授（東洋史学）、菊地真准教授（地理学）が授業をサポートしてくれている。また、河島の退職にともない、二〇一九年度からは小山准教授と菊地准教授の二人が主たる授業担当者となっている。

（5）ここでの授業は、必ずしも通常の教育実習のように教科書に即したものでなくてもよく、大学での学びを活かした特色あるテーマで行うことを奨励している。但し、事前に学習指導案を作成させた上で大学において入念な指導と模擬授業を行い、かつ高校教員の指導を受けることが条件である。

（6）御影高校総合人文コース活動実績（https://www.hyogo-c.ed.jp/~mikage-hs/sougoujinbun/katsudou_31.html）、神戸大学大学院人文学研究科・文学部高大連携プログラム（http://www.lit.kobe-u.ac.jp/chirekika/）。

（7）教職浪人もいるため正確な数字は挙げられないが、専任の教諭と常勤講師だけでも二〇人ほどが教職に就いているものと推察される。

（8）但しこの能力は、大学での普段の学習のあり方と関係しており、必ずしもこの授業の中で培われるべきものではない。この授業では、試みとして、大学生の学習効果を上げるための方法として、二〇一四年度から毎回の授業のまとめと課題を記録させ、高校教員ともその内容を共有しつつ、大学教員がコメントを記して返却する「実習ノート」を導入した。検証は充分ではないが、一部の学生については自分との対話を通して毎回の課題と成果を自覚させる効果が認められた。